

金融教育の現場レポート

「金融教育」は、社会の中で生きる力を育むことを目的として行われる教育です。このコーナーでは、金融教育の授業がどのように進められているか、教育現場に立つ先生や、授業を受ける生徒の姿をレポートします。

今回は、京都府にある京都教育大学附属桃山小学校・池田恭浩先生が実践している、小学校で実践可能な金融教育についてご紹介します。

仕事を考える前に「お金」を考えるカリキュラムを

「『仕事』って何ですか?」「働いて、お金を稼ぐことですか?」「では、お金の役割って何ですか?」。池田先生の金融教育は児童たちとのこんなやりとりからスタートしました。

平成23年、小学校社会科3年生の学習単元「地域の生産や販売に携っている人々の働き」を学習するうえで、「お金の役割」を採り入れた独自のカリキュラムを作成しました。それは、「仕事について考える」前に、「仕事とは何のためにするのか」「仕事とつながりのあるお金の役割とは?」という金融教育の基礎を捉えてもらいたいと考えたからです。

池田先生は30歳で教職に就く前は民間企業で働いていました。社会で「お金を稼ぐための」仕事の大変さや、企業を辞めた後の無職のときには「収入のない恐怖」も味わいました。「大人になれば、こんなにも『お金は大事』と実感するにもかかわらず、『お金とは何か』が学



京都府
京都教育大学附属桃山小学校
池田恭浩教諭

表1 「お金の三つの役割」※の実践内容

単元名「見つけたよ、まちの人たちの仕事」	
指導計画（実施） 「見つけたよ、まちの人たちの仕事」（全 34 時間）	
第1次 「仕事」って何ですか？（11 時間）	
・「仕事」とは、何のために、どのようなことをするものなのかを考える	(1 時間)
・「仕事」とつながりのあるお金の役割を考える	(1 時間)
・お金のない時代はどのようにして欲しい物を手に入れていたのか考える	(1 時間)
・物々交換の問題点を考える	(2 時間)
・物々交換を円滑に行うための物（みんなが欲しがった物）について考える	(2 時間)
・交換するための物としての石や貝の問題点と金貨・銀貨・銅貨のいいところ、問題点を考える	(1 時間)
・今のお金について考える	(2 時間)
・これまでの振り返りをして、「仕事」とお金のつながりを確認する	(1 時間)
第2次 「つくる仕事」について考えよう！（13 時間）	
第3次 「売る仕事」について考えよう！（10 時間）	

※第9回金融教育に関する小論文・実践報告コンクール受賞作品

校教育の中ではあまり扱われていないことを、何とかしたいという思いがありました」という池田先生。現任校に赴任して3年目に、京都教育大学の大学院で学ぶチャンスを得て、経済学の教授に師事。生活に身近な「お金」に焦点を当てた、新しいカリキュラムを構築することをテーマとして、研究に取り組みしました。

「お金の三つの役割」を学ぶ実践授業

モデルのない新しい授業だったため、池田先生にとっても実践前は3年生の児童がどこまで理解できるかは未知数でした。「見つけたよ、まちの人たちの仕事」という単元の最初（第1次）に、独自のカリキュラム「『仕事』って何ですか？」を加え、お金には「交換を助ける役割」「価値を計る役割」「価値を貯める役割」の三つの役割があることを導いていきました。

授業は子どもたちを主体として、それぞれの興味・関心度合いや理解力に合わせたため、なかなか予定通りに進みませんでした。その結果、最初は4時間で終了するはずの第1次のカリキュラムは11時間に及んだと言います。（表1）

児童の興味がふくらむ「物々交換」と金融教育の実践

11時間にも授業が長引いた大きな原因は、「お金のない時代」における「物々交換」を理解するところで、子どもたちの純粋な発想力が池田先生の想像以上に展開していったためです。

自給自足の時代から、物々交換が始まって人々が分業（＝仕事）を行うようになり、交換するためのツールとして価値を分かりやすくするためにお金が生まれたという流れを、子どもたちは正しく理解できました。そして、「宝石とリンゴ、どちらの方に価値があるのか？」という物々交換の価値にまで発想は及びました。

また、物々交換から派生して、モノを運ぶためには「入れ物がある」「運ぶ道具も必要」「道路もある」などの意見が子どもたちから出ました。そうした役割分担から仕事が生まれてきたことなどにも想像力は広がりました。

「食べ物が十分でない時代だったら、モノの価値をどう捉えるのかということから、子どもたちの純粋な発想は広がっていきました。教師がうまく導いてあげること、子どもたちがもともと持っていた価値観の原石を磨くこ



スーパーでの買い物の様子



ドキドキしながらレジに並びました



おつりとレシートも受け取ります



真剣にお昼ご飯を選んでいきます



自分で買ったお昼ご飯はおいしかったよ！

とができたと思います」と池田先生は話します。

小学校での 金融教育の可能性

池田先生はその翌年、2年生の児童を担当し、生活科で「買い物体験」の授業を行いました。そこで、子どもたちが「買い物をするときの判断基準」を分析したところ、2年生では一人で買い物をしたことのある児童が少なく、まだ明確な判断基準を持っていないことがほとんどだということが分かりました。

そのため、池田先生は、お金をテーマに教材化するのであれば、「交換の概念」が理解できて、社会科で仕事に

ついて学ぶ3年生が、「お金の生涯教育のスタート地点」としてふさわしいのではないかと考えるに至りました。

ちなみに、平成25年度は4年生で前述の「お金の三つの役割」を4時間で実践することが可能だったということです。

概念を身につける— これからの金融教育への挑戦

池田先生は、小学生のうちに「お金のはたらき」を学び、お金を稼ぐテクニックではなく、お金の本質を捉える知識と、個々の将来の価値観にもつながる概念をきちんと身に付けてほしいと考えています(表2)。

例えば、4年生の社会科は公共事

業について学んでおり、「消防士さんは誰からお給料を貰っているか？」と尋ねると「署長さん？」という答えが返ってきたそうです。池田先生は、「社会を考えるとときに、お金抜きに考えるのはおかしいと思うのです。同じ消防署について学んだ際、『わたしたちの安全な暮らしを守るためには何が必要か？』と問いかけたときに、『お金が必要や』と言った子どももいます。消防士さんのお給料は税金で賄っていることを教えた方が、実社会に迫って考えられるし、リアリティがあります。ほかに、京都市の1年間のゴミ処理費用一覧を子どもたちに示してゴミ問題を考えた授業も、『捨てるものにもお金がかかっている』ということに気づ



いた子どもたちは興味津々でした。『お金で説明する授業』は子どもにも理解しやすいため、今後も新たな授業を考えてみたい」と池田先生は話します。

『小学校でお金、お金というのは相応しくない』という声もありますが、私の授業の最大の狙いは、学ぶことにより『お金に囚われてほしくない』ということ。世の中が、交換のための分業で成り立っていると分かれば、子どもたちは『人がいい思いをするのはあり得ない』『自分も社会で役立つ何かを与えたい』と考

えられると思います。そして、お金は交換のための手段であるという本質的な概念が身につけば、『将来経済活動をするときに、価値ある交換ができる人間になる』と考えられるようになってくれると思っています。

確かな概念から本質を見極める力を育む。池田先生は今後もそんな金融教育に挑戦していきます。

表2 池田先生の「社会科でお金を採り入れて学習すべきこと」

学年	主に学習すべきこと	主に活用するお金の役割	主に学習する概念	お金を採り入れる主な学習内容
第3学年	お金の流れ	交換を助ける	買う 売る 仕事 (費用)	生産に関する仕事(農家・工場) 販売に関する仕事(小売店・ スーパーマーケットなど)
第4学年	様々なことにかかわるお金	価値を計る	費用 (税金)	飲料水・電気・ガス 廃棄物の処理(ごみ・下水) 消防署・警察署
第5学年	ねだんに含まれるお金	価値を計る 価値を貯める	価格 費用 利益	農業(稲作・野菜・果物・畜産) 水産業 工業(金属・機械・石油化学) 情報産業(放送・新聞)
第6学年	みんなのために使うお金	交換を助ける 価値を計る 価値を貯める	税金	租税の役割

「お金の役割」を考える金融教育の実践

京都府
京都教育大学附属桃山小学校 池田恭浩教諭